

文化ナショナリズムにおける宗教

——保守主義的オピニオンリーダーと「神道」——

LI Yunhao

ベネディクト・アンダーソンの「想像の共同体」理論が示すように、近代における「民族」という概念は、民族の「アイデンティティ」として再構築されたものであり、近代的な「民族」という共同体および「民族性」(独自性)は人為的に構築された存在である。日本にもそのような傾向が見られた。日本における「文化ナショナリズム」、すなわち「日本人独自論」は、異なる時代背景のもとで発展し、形成されたものである。

一方、神道は日本の伝統的宗教と位置づけられており、戦前においては国家神道政策という国教的属性である政策のもとで、政治的かつ民族主義的な属性が付与された。さらに戦後においても、神道は日本文化を象徴する要素の一つとして変容してきた。神道を解釈する活動は、現代においても神道に関する多様な文献として生み出され続けている。それは現代人が伝統宗教に対する解釈と再構築を通じて、自身の民族的アイデンティティを整理し、再構築している事例として位置づけられる。

本論文は、現代の保守主義的な思想を有するオピニオンリーダーが、いかに神道を用いて民族的文化ナショナリズムを説明し、それを通じて民族や宗教に関する自己の見解を発信しているのかを分析することを目的とする。研究対象は、戦後20世紀後半と現代21世紀の保守主義的オピニオンリーダーによる著作である。

第一章では、吉野耕作による文化ナショナリズムの定義および説明を概観した。また、船曳建夫による「日本人論」に関する研究を、日本における文化ナショナリズム研究として検討した。それらの文献研究の方法を参照枠として、本論文では文献研究法による質的研究を採用した。さらに第一章の末尾において、保守主義者およびオピニオンリーダーという二つの概念の定義を明確化した。すなわち、保守主義者とは「安定性を保障しつつ緩やかに変化していく制度や慣行を支持し、一定程度進歩主義に反対し、伝統的価値観への回帰を志向する立場」を有する者を指し、オピニオンリーダーとは「世論に影響力を持つ人物」を指す。本論文は、保守主義的オピニオンリーダーの著書や公の場での発言を分析対象とする文献研究を通じ

て、彼らが日本民族の特性や精神をいかに自らの言葉で説明しようとしたのかを明らかにするとともに、神道をどのように利用して民族的文化ナショナリズムを構築しているのかを検討する。

第二章において筆者が設定する研究課題は、2000年代以降の保守主義者が「神道」をいかに解釈しているのかという点である。本章では、21世紀において代表的な保守主義的オピニオンリーダーである、合計4名を対象として選定し、彼らが神道をどのように解釈し、神道を用いて日本民族に関する自己の見解を表明し、民族主義的思想を発信することで、日本の文化ナショナリズムをいかに構築しているのかを検討した。その結果、当該時期のオピニオンリーダーにおける神道観には共通点が認められることが明らかとなった。すなわち、戦前の国家神道思想に対する一定の肯定的評価が見られ、国家主義および集団主義を強調するとともに、政治の正統性を神道の宗教的神聖性と結び付けて捉える傾向が確認された。

第三章において筆者が設定する研究課題は、戦後20世紀の保守主義者が神道をどのように解釈したのかという点である。本章では、当該時代を代表する保守主義的オピニオンリーダーの4名の著書を分析対象とし、彼らの神道に対する理解および解釈の方法、ならびにそれを通じて日本民族の特質についていかなる認識を示しているのかを検討した。分析の結果、この時代のオピニオンリーダーの思想には共通する特徴があると認められた。すなわち、戦時期に政府主導で形成された神道観から距離を取り、あるいはそれを批判的に捉えつつ、文化の本源、美意識、精神、さらにはグローバルな普遍的価値といった多様な次元から神道を再解釈している点である。そこには、強い個人主義的傾向と人文主義的精神が色濃く反映されていることが明らかとなった。

以上の分析を通じて、本論文は、異なる時代背景のもとにおいて、保守主義的オピニオンリーダーが神道をいかに解釈して日本の文化ナショナリズムを形成し、自らが理解する「日本人論」を構築して、それを社会に向けて発信してきたのかを比較検討した。また本論文は、現代の時代状況を踏まえ、神道を政治的文脈のみに限定して捉えるのではなく、その文化的属性により重点を置くことで、伝統宗教としての神道および日本の文化的象徴としての諸要素を、より積極的かつ合理的に活用する可能性についても考察した。